

日本ホリスティック教育/ケア学会 創設大会報告

2018年6月18日、大阪府立大学 I-site なんばにて、日本ホリスティック教育協会の研究部門を母体として、日本ホリスティック教育/ケア学会が創設されました。以下に、当日の流れをご報告します。(以下、敬称略・五十音順)

■座談会 (9:30~11:00)

「日本ホリスティック教育/ケア学会」創設にあたって—「学会」を立ち上げることの意味・「ケア」を入れることの意味

話題提供者：金田卓也（大妻女子大学）、成田喜一郎（東京学芸大学）、吉田敦彦（大阪府立大学）

コメンテーター：西平直（京都大学）、西村拓生（奈良女子大学）

司会：井藤元（東京理科大学）、河野桃子（信州大学）

■創設総会 (11:00~11:30)

司会進行：曾我幸代（名古屋市立大学） 書記：守屋治代（東京女子医科大学）

1. 創設趣意書説明 河野桃子（信州大学）
2. 会則(案)説明 守屋治代（東京女子医科大学）
3. 理事・監事選出

理事候補者紹介

青木芳恵（福岡大学）、池田華子（天理大学）、井藤 元（東京理科大学）、
金田卓也（大妻女子大学）、河野桃子（信州大学）、孫 美幸（大阪大学）、
中川吉晴（同志社大学）、成田喜一郎（東京学芸大学）、守屋治代（東京女子医科大学）、
吉田敦彦（大阪府立大学） 以上10名

監事候補者紹介

大山博幸（十文字学園女子大学）、曾我幸代（名古屋市立大学）

4. 役員候補・設置予定委員会の紹介

会長：吉田敦彦
副会長：中川吉晴、成田喜一郎
事務局長：守屋治代

- 1) 機関誌編集委員会
委員長：成田喜一郎
- 2) 広報委員会
委員長：青木芳恵
- 3) 国際交流委員会
委員長：中川吉晴
- 4) 新ホリスティック教育協会との連携担当理事
金田卓也

5. 創設宣言

閉会の辞

■ポスター発表（12:45～13:00）

■個人発表A・B（13:00～15:05）

■ラウンドテーブルA・B（15:15～16:15）

=====

■座談会報告

今回のシンポジウムは、長年ホリスティックな研究・実践に携わってこられた成田喜一郎氏（東京学芸大学）、金田卓也氏（大妻女子大学）、吉田敦彦氏（大阪府立大学）を話題提供者に、コメンテーターに西村拓生氏（奈良女子大学）、西平直氏（京都大学）をお迎えして開催された。司会は井藤元氏（東京理科大学）、河野桃子氏（信州大学）が務められた。

新会長の吉田氏による挨拶の後、司会の河野氏より、①教育とケアを絡めながら探究していくことの意味、②教育やケアへのホリスティックなアプローチ、およびホリスティッ

クな志向を持つ教育やケアに関して、学術的に研究することの意味、の二点を座談会の論点とすることが示された。続けて井藤氏より、新学会創設にあたり、会員一人一人が主体的に参加できる形を大切にしたいという意図から座談会形式を採用したことが紹介され、会場内の机・椅子の口の字型の配置も含め、この場そのものがホリスティックな志向を表現していることが付け加えられた。

話題提供としては、まず成田氏から、長年中学校教諭を務められた実践者としての視点を持ちつつ、その後大学（教職大学院）に籍を移されて、教育学、及び教育の実践を支える様々な理論と実践との関わりを俯瞰してこられた歩みが語られた。フィールドワークを重ねるたびに改訂を重ねた「カリキュラムを俯瞰するための『教育諸理論の三層包括分類表 (Ver.10.0)』」が資料として配布され、新たに仮説的に加筆されたケアの三側面が、この後の議論の手がかりとして示された。

次に金田氏は幼児教育の視点から、学会名にケアが加わることについては、とても自然な流れと受け止めていること、同時に、ケアを冠することに伴い、医療、看護、福祉の領域から好意的な関心が寄せられていることが指摘された。また、論点②に関わって、**art-based research** に関するご自身の論ⁱⁱⁱにも言及されながら、研究という営みにホリスティックに取り組むことの必要性が語られた。

最後に吉田氏は数多くの学会が存在する中、あえて新学会を創設する理由について改めて問うことから話を始めた。そこで語られたのは、方法論的によりホリスティックなアプローチによる研究を切り拓いていくことの意義。方法としてのホリスティックと、対象としてのホリスティック、その両面を深めていく必要性が語られた。なお、**art-based research** の一例として、フロアにおられた野沢綾子氏（ホリスティックコネクション）に急遽御研究の一端について語っていただく場面もあるなど、次第にホリスティックな場が温まっていく中、コメンテーターの西村氏、西平氏へとバトンが渡された。

まずは、コメンテーターの西村氏より、「何のために新しい学会を立ち上げるのか」という問いが改めて発せられた。続けて、「協会から学会になるということは〈境界〉ができること、〈殻〉をまとうこと。それは、抵抗を受けとめながら動く〈ムーブメント（運動）〉とつながる。また、前日の金香百合氏の発言『幸せな子ども時代を保障する』ということがケアの真髄であり、それと向き合っていく社会運動としての力をもっていくのではないか」というコメントがあった。「ホリスティック教育とケアとの関係は？」という会場からの問いに対しては、吉田氏より「ケアを含んだホリスティックな教育。ホリスティックなケア（看護・福祉）。**Edu-Care** を新たに生成していくという立場がある」という、学会設立の根幹に関わる重要な確認を行うことができた。他にも、「教育がケアを必要としており、学会名に『ケア』が入っているから参加した」「研究者と現場の声を対等に扱う、一体となったこの学会に期待する」「30代、40代の若手の研究者が、これまでホリスティック教育研究の中心を担ってきた先輩方の言葉を次の世代に紡いでいくことが重要である」「若い世代が今の社会のあり方に抗う力が分断されるのではなく、それをつなげていく

ホリスティックな見方が可能ではないか」等のコメントが続いた。最後に、もうお一人のコメントーター西平氏より「教育とケアに関わる漢字〈教〉〈保〉〈習〉〈助〉〈援〉などを一文字ずつバラバラにして自分が一番気になるのはどれか、どれとどれがくっつくか、四字熟語にできないか」等から、根源的に教育とケアの関連を考える方法が提示された。質疑応答の際も、終始穏やかな笑いが絶えず、温かい雰囲気の中で学会の根幹に関わる重要な議論が進んだ。

池田華子（天理大学）・孫美幸（大阪大学）

-
- i 当日配布された資料（「カリキュラムを俯瞰するための『教育諸理論の三層包括分類表（Ver.10.0）』」、及び「カリキュラムを俯瞰するための『3つの学習スタイル/ケアの関係構造（Ver.10.0）』を読み解く」）は次頁を参照のこと。
- ii 金田 卓也『教育に関する質的研究における Arts-Based Research の可能性』ホリスティック教育研究、第 17 号、1-16 頁、2014 年。

参考資料 1-1 カリキュラムを俯瞰するための「教育諸理論の三層包括分類表(Ver.10.0)」:2017.6.17 成田喜一郎

三層包括的分類	Transformation 変容、「主体変様」「創成」		
	Transmission 伝達 (バイトソン 2000・学習階型Ⅰ)	Transaction 交流 (バイトソン 2000・学習階型Ⅱ)	ホリスティック・アプローチ (バイトソン 2000・学習階型Ⅲ)
思想哲学 哲学的背景	Atomism(原子論) 本質主義的 論理実証主義、分析哲学 デカルト、ニュートン、ウイゲンシュタイン、 ヘルバルト 等	Pragmatism(プラグマティズム) 構造主義 構成(構築)主義的 デューイ、コールバーグ、シュワップ (生成変化のプロセス、経験理解の ための実験科学、問題解決、反省的知性=省察) ニコラス・ルーマン 等	社会(的)構成主義的 Holism(全人・全連関論) エマーソン、フッサール、ハイデガー、キルケゴール、ブーバー、バイトソン、ホーム、カ ンツァー、クリシュナムルティ、サティシュ・クマール、ディクナット・ハン、先住民の伝統 智、老子、芸道(世阿弥の能楽論)、禅、精肉の思想・哲学(内村鑑三) 等
心理学的背景 脳科学的背景	行動主義心理学 バプロス、ソーンダイク、スキナー 認知と情動・感覚運動の切り離し	認知発達心理学 ピアジェ、ヴィゴツキー 認知と情動・感覚運動との関連性(知・徳・体のバランス)	深層心理学、トランスパーソナル心理学 ユング、マズロー、ウィルバー 等、 黒田正典・主体変様論、認知・情動・感覚運動の三位一体性
教育学 教育学的背景	ポピット、ブルーム、カルナップ、教授学習理論(刺激-反応) (物質主義、要素還元主義、テクノロジーによる人間行動制 御、価値中立性)	問題解決学習論、課題解決学習理論、学習科学理論 R.K.ソーヤ 、佐藤学、秋田喜代美、三宅なほみ 小田博志 文化・歴史的活動理論 ユーリア・エンゲストローム、山住勝広	「実存主義と現象学」的教育学、フレール、シュタイナー、フレイレ、V.E.ファンク ブリック、ケアリング教育学、カートナー、ノディングス、スローン、J.ケーン、ロン・ミラー、 ウィギンズ&マクタイ、J.P.ミラー、吉田敦彦、中川吉晴、今井重孝、手塚郁恵
教育目的	基礎的技能・基本的知識・概念の伝達・習得 Have もつこと	思考力・判断力・表現力等(想像力)、合理的な問題解決能力・判断 力、合意形成能力の育成、活用・探究 Do(Have) おこなうこと	意志=感情=思考=精神の関係深化 意味や価値の自覚、 論理と直観との均衡、主体変様と社会参画 Be(Do・Have) あること
教育課程(カリキュラム =計画・実施・達成、 潜在)	教育内容に焦点 教科中心系統的カリキュラム(系統主義) 時間割の中の1コマ毎の各教科等の授業の編成 PDCA 教案(指導案)	問題解決プロセスへの焦点、経験中心カリキュラム(経験主義)、 総合的な学習の時間 教科・領域を超えた〇〇教育カリキュラム 時間割を超えた学校内外における学習の拡張・深化へ ALACT、CAP、Do、理解を促すカリキュラムの逆向き設計、学習指導案	多層的な関係性に焦点化 出会い・気づき・覚醒等の重視 理解の6側面 UbD 系統主義と経験主義のつながり・つりあい・つつみこみ・つづける 専門性・世代・地域等を超えるESD(持続可能な開発のための教育) OODA 国際バカロレア・カリキュラム(PYP・MYP・DP、CP) e-カリ曼茶羅
教育・学習方法 ケア	講義形式、プログラム学習、練習・ドリル・反復、完全習得学 習、チャイム・ベルによる時間の制御 教師にやらされる、アクティブ・ラーニングⅠ ケアⅠ 発問(内容質問) 学校図書館(個人的な利用、関連教科文献貸出)	探求学習、発見学習、意思決定モデル、個別学習 個人・グループ調査研究(調べ学習)、ケーススタディ、道徳的ディレンマ 方法・活動に焦点化された、アクティブ・ラーニングⅡ ケアⅡ 単元を貫く問い(単元質問) 学校図書館(個人・グループでの活用、調べ学習での活用)	創造性開発性思考法、つながりを深める教授、協同学習、イメージワーク、ホー ル・ランゲージ学習、ムーブメント、ホールスクールアプローチ、共に創る時間の流れ 個に始まり個に舞い戻り思考を深める、アクティブ・ラーニングⅢ ケアⅢ 本質的で根源的な問い(永続的な理解・思考、社会参画を促す問い) 学校図書館(教科・専門性を超えて人と人をつなぐアフォーダンス)
主な教育資源	標準化された教科書 市販の副教材	さまざまな知的刺激(知的好奇心を引き出す多様な教材・学習財)	子ども・教師の人間性・存在そのもの、教師のライフヒストリー
評価方法 (確認とその記録)	標準テスト、選択テスト、正誤テスト、完成テスト(数値化) 「客観」性の重視	チェックリスト、観察と記録、意思決定記述評価、質問紙調査、自由記 述レポート、ポートフォリオ評価、パフォーマンス課題、ルーブリック 実践記録・実践報告、エスノグラフィー、協働エスノグラフィー 主観による主観の客観化	面談、振り返り 日記の記述、自己評価、相互評価、対話、省察-観想、ナラテ ィブ・アプローチ、オート・エスノグラフィー、創作叙事詩・解題、ルカワ型テスト、 HOPE 評価(Holistic, Ownership-based, Participatory, Empowering) 目前心後・離見の見、間主観(相互主観)性の世界へ
研究方法	仮説検証型研究(定量的、量的研究)	仮説検証型研究(定量的、量的研究) 仮説生成型研究(定性的、質的研究) 量的・質的研究方法の統合、質的研究の多様性	学校フィールドワーク、研究対象と主体との協働研究、当事者研究 質的研究入門(ブリック) アーツ・ベースド・リサーチ(金田卓也) (詩、物語、絵画、パフォーマンス等そのものが研究成果物)
組織マネジメント	ヒエラルヒーキー型(垂直方向)	ネットワーク型(水平方向)	サーバントリーダーシップ型(水の思想・川の組織論、循環)
各学校種別傾向性	大学院(修士課程)・大学・高等学校・中学校等	教職大学院(専門職課程)・小学校・幼稚園・保育所等	特別支援学校、一部私立学校(自由学園等)、NPO 法人立学校等

カリキュラム*を俯瞰するための「3つの学習スタイル/ケアの関係構造 (Ver.10.0)」を読み解く：2017.6.17 成田喜一郎

*カリキュラム=計画・実施・達成という一連の流れを包括し、かつ潜在する多様な文化を含む概念

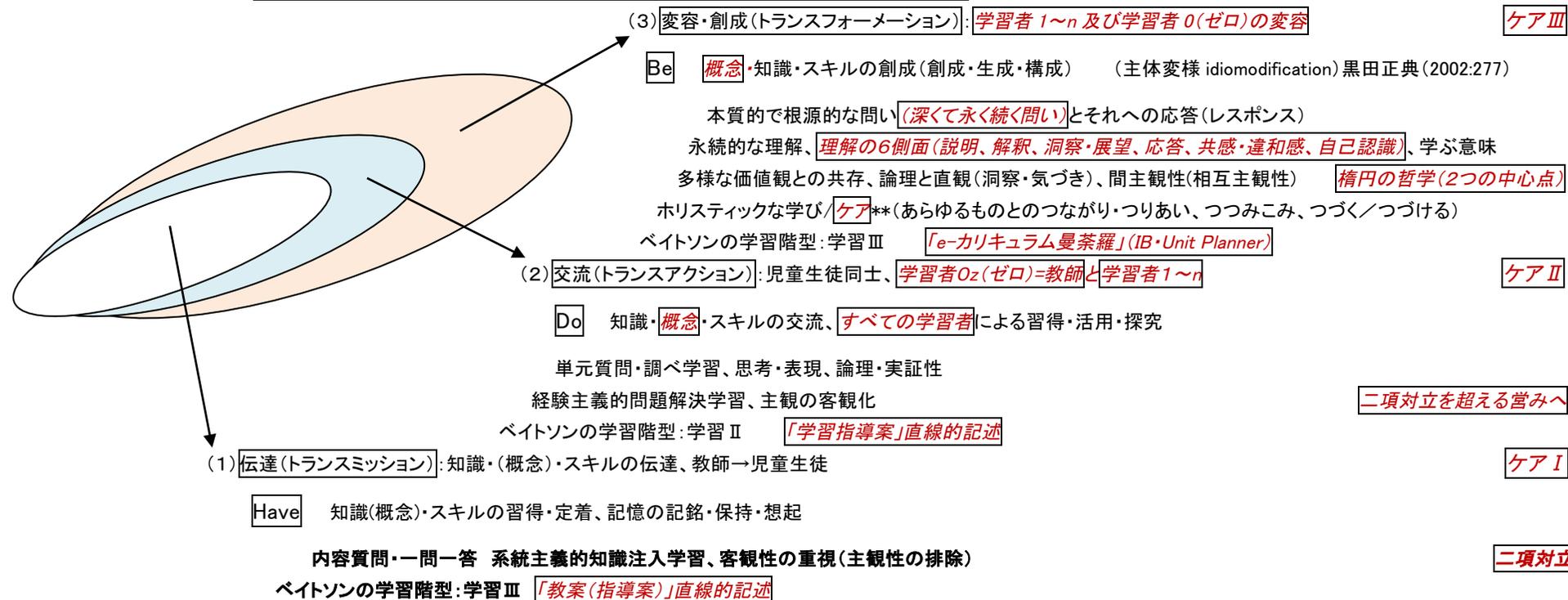


図 「3つの学習スタイル/ケアの関係構造図(Ver.10.0)」(筆者作成 2017.6.17)

**ホリスティック Holistic の訳：[哲学]全体論の、「医学」全体観的治療の 全人的、全連関的、全人・全連関的、・Holistic ← Whole, Health, Heal, Holy

ホリスティックな学び/ケアとは、あらゆるひと・もの・こととのつながり・つりあい、それらのすべてをつつみこみ、つづく/つづける、意味ある深い学びを「自他共に」引き出す営みのことである。

その背景に哲学、心理学、歴史・社会学、**経済学**、アート・芸道などがある。(成田喜一郎 2015.12.28+2017.6.17)

論理と直観、学問と生活、分析と総合、有為と無為、客観性と主観性(間主観性)など・・・二項対立を超える(止揚 aufheben する、架橋・往還を続ける)概念

つながり(関係性): 環境(物)・他者・自己との対話・共生をめざす長く険しいプロセス、切れかかった「つながり」を回復すること、新たな「つながり」を発見できるか

つりあい(均衡性)/つつみこみ(包括性): 論理と直観(気づき・ひらめき)、有為と無為、客観と主観(間主観性)、愛憎、正邪、清濁、上下、左右、縦横、男女、長幼、新旧、寒暖、今昔など、

幾多の二項対立(やその狭間を含む三竝み・鼎立)を超えて、時空間・人間(じんかん)を生きることができるか

つづく/つづける(持続可能性と持続不可能性との闘ぎ合い): 個体の生/死を超える、世代間継承の可能性/不可能性、希望と絶望とがせめぎ合う現実を前に、それでも生き続けていこうと

する、それでも人生に Yes とと言えるか

【主な参考文献】

ジョン・P・ミラー(1994) 吉田教彦・中川吉晴・手塚郁恵訳『ホリスティック教育:いのちのつながりを求めて』春秋社

ベイトソン(2000) 佐藤良明訳『精神の生態学』新思索社

黒田正典(2002)「東洋と西洋: 主体変様の認識と客観的認識」『心理学の哲学』北大路書房、渡辺恒夫・村田純一・高橋澤子編, pp.273-303